

AMH1.4png/ml (10pmol/L)

以下の症例における排卵誘発 の有用性について

レディースクリニック北浜

幸寺 渚, 今井 和美, 北川 晴香, 上田 鈴,
貴志 瑞季, 中西 裕子, 金森 真希, 奥 裕嗣

第58回日本生殖医学会学術講演会
利益相反状態の開示

筆頭演者氏名： 幸寺 渚
所 属： レディースクリニック北浜

私の今回の演題に関連して、開示すべき利益相反状態はありません。

目的

- ▶ 抗ミュラー管ホルモン (AMH) の測定は卵巣予備能の評価に有用性があるとされている。AMH低値症例では刺激周期における体外受精において低反応が予想される。
- ▶ 今回、poor responderが予想される症例においてクロミッドを併用した刺激周期Antagonist法により排卵誘発を行い、採卵に至った症例を対象に、AMH値より予測できる採卵数と実際の採卵数、胚発育を比較検討したので報告する。

AMH

- ▶ AMHとは19番染色体上の遺伝子にコードされた、糖蛋白ダイマーである。
- ▶ 前胞状卵胞と小胞状卵胞の顆粒膜細胞から分泌される。
- ▶ 個人差があり、加齢と共に低下する。

▶ **期間**

2012年4月～2013年4月

▶ **対象**

AMH1.4ng/ml(10pmol/L)以下

68症例87周期

▶ **平均年齢**

37.6±3.8歳

▶ **AMH測定方法**

ELISA法

AMH Gen II ELISA試薬(BECKMANCOULTER社)

刺激方法(刺激周期)

月経周期	1	2	3	4	5	6	7
クロミッド			2	2	2	2	2	
rFSH			450	→		→		
HMG						→		
アンタゴニスト						→		
HCG							→	36時間後
超音波						●	●	
採血						●		

採卵

主席卵胞
13-14mm 2個以上
主席卵胞 1個あたり
E2 150pg/ml以上

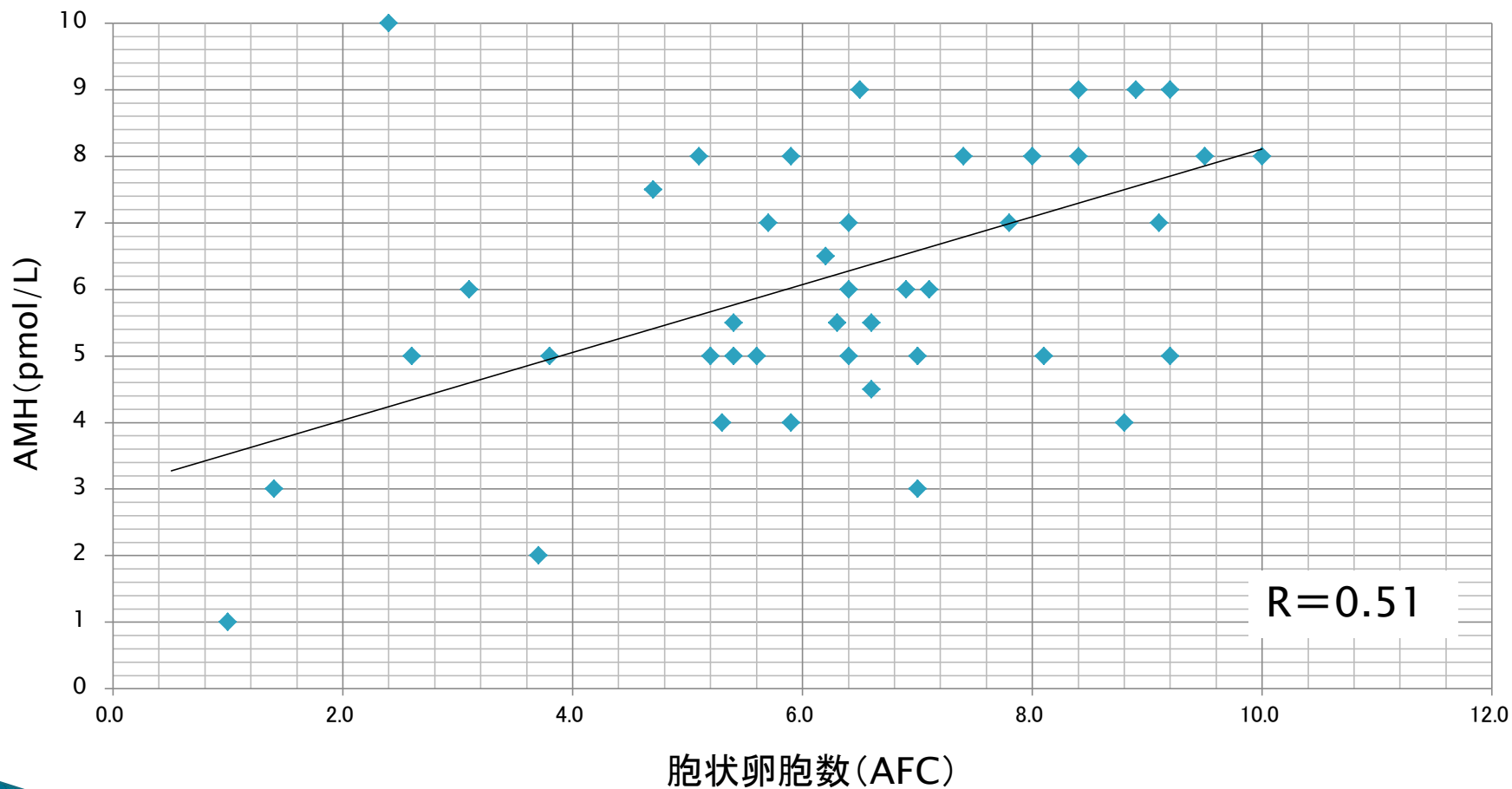
主席卵胞
18mm
2個以上

方法

- ①AMHと胞状卵胞数(AFC)の相関性について検討
- ②採卵数を予測する指標として $AMH(\text{pmol/L}) \div 2 =$ 予測採卵数とし、実際に採取できた採卵数を比較検討
- ③成熟率、受精率、胚盤胞到達率、採卵数0個の症例について検討

結果①

AMHと胞状卵胞数の相関性



結果②

AMHより予測できる採卵数と実際採取できた採卵数

図1 予測採卵数

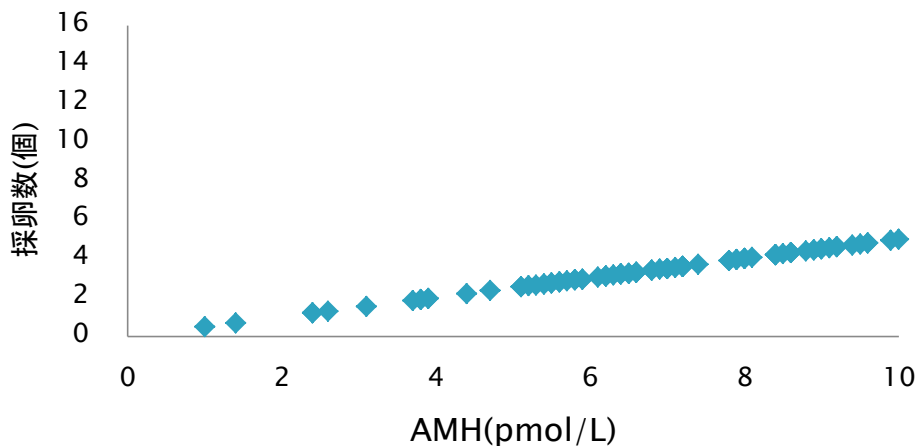
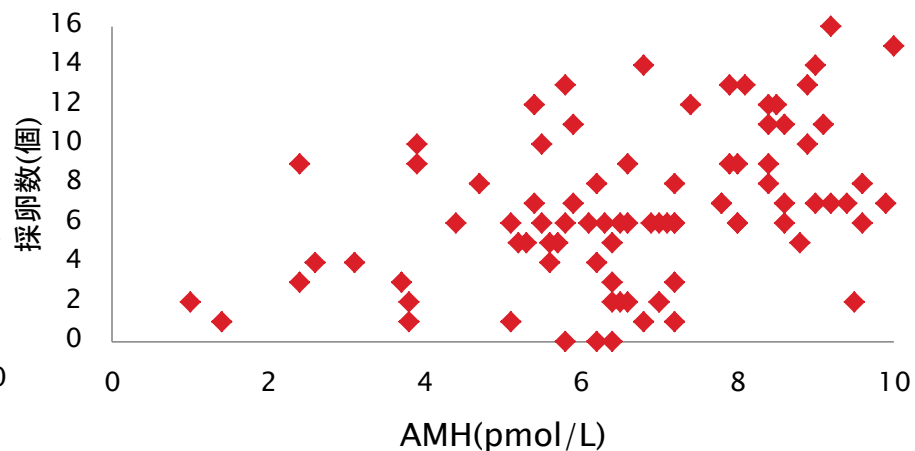


図2 採取採卵数



	平均	確率
予測採卵数	3.3 ± 1.0個	82.8% (72 / 87)
採取採卵数	6.9 ± 4.6個	

結果③

成績

成熟率	83.2% (500個 / 601個)
受精率	81.4% (407個 / 500個)
胚盤胞到達率	53.1% (94個 / 177個)
採卵数0個の症例	0.03% (3周期 / 87周期)

まとめ

- ▶ AMHより採卵数を予測した結果、予測採卵数より多く採卵数が得られた。
刺激周期での採卵によって多くの卵子を採取し、受精卵が得られる事は効率的であると考えられる。
- ▶ 採卵数0個の症例は0.03%と低く、AMH低値症例においてもpoor responderを考慮した排卵誘発を行う事により採卵数0個の症例を軽減できると考えられる。

結論

- ▶ 今回の結果を踏まえてAMH1.4ng/ml(10pmol/L)以下の症例であってもクロミッドを併用した刺激周期Antagonist法による排卵誘発は有用であると示唆された。
- ▶ AMHと胞状卵胞数に相関性があったことから、今後胞状卵胞数も考慮し、テーラーメイドな排卵誘発に取り組んでいきたいと考える。